

「高良玉垂命と相殿神八幡大神・住吉大神について」

2024. 3. 16 講師 国武 靖正

1. 小戸大神宮（おどだいじんぐう）編

古事記の舞台で、祝詞の冒頭では、「筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原」と唱えられています。神社検定試験でも出題あり、訪ねてみたいと思っていました。幸い機会ができ、博多の妻の友人の車で、小戸大神宮へ向かいました、虹の松原の姪浜側にあり、以前子供を通わせたヨットハーバーなどの広い公園で小戸大神宮は地図を頼りに探す位廃れていました。

奥の小高くなった処の建物に、小戸大神宮はこちらへと手書きされた粗末な建物の前にゆくと、偶然にも建物を開けようとする人達がい、名刺を差し出し大阪から訪ねて来たものと挨拶したところ、中に招かれ椅子に座って部屋を見ると、神殿らしきものはなく資料の保管場所のようでした。

名刺を頂いた方は、「川岡保」氏で、小戸大神宮の神職の末裔と述べられ、現在、小戸大神宮総代会会長をされている、テレビ・講演会に出演、今度の九州大学教授との討論会の準備の為にきたとのこと。

小戸大神宮は、伊邪那岐大神が「火の神」を産んで亡くなった「伊弉冉大神」に、もう一度会いたいと黄泉の国へ行くが、伊弉冉大神には、今迄の面影はなく穢れた処であった、逃げ出すと、ヨモツシコメたちが追いかけてきたので、山桃の果実を投げそれを食べてる隙に小戸の阿波岐原まで逃げてきた、ここで伊邪那岐大神は「わたしは見る目もいとわしい、汚い、穢れた国へ行ってしまった、御身を禊祓いしようと」宣言されて、「筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原」に至り、禊祓いをされた処が小戸大神宮です。



日向の海浜で禊祓が行われたのは、この地が朝日がのぼると、すぐに日の当たる、大変に清らかな重要な所だったからです。身に着けていた物から次々と神が誕生します。御衣から和豆良比能宇斯能神(煩わしいの主の神)が誕生しています、病気など引き起こす神も生まれました。毎年6月と12月に神社で行われる。大祓いには、人形に穢れを移して川に流す習俗がありますが、その源流を伝える神話です。

水の底を濯ぐときに成った神の名は、底津綿津見神、次に底筒之男命、中を濯ぐときに成った神の名は、中津綿津見神、次に中筒之男命、水の上を濯ぐとき成った神の名は、上津綿津見神、次に上

筒之男命です。(この三柱の綿津見神は安曇の連たちが大切におまつりする神です。)
底筒之男命・中筒之男命・上筒之男命の三柱の神は、墨江の三前の大神です。



ここに左の御眼をお洗いになるときに成った神の名は、「天照大御神」です。次に、右の御眼をお洗いになるときに成った神の名は「月読命」です。次に、御鼻をお洗いになるときに成った神の名は、建速須佐之男命です。

小戸大神宮は、天照大御神・志賀三神・住吉三神・警固三神が誕生された聖地です。志賀三神とは綿津見神のことで海洋の神様、海上の守護神として崇拝されています。

警固三神とは福岡市天神町のど真ん中に祀られています、「合格祈願・必勝祈願・厄除祈願」の神様であります。神功皇后が新羅遠征の際に頭われて、軍衆を警固してくれたから勝てた。それで、神功皇后は、この三神を警固大明神として祀ったと言われています。

神主が神前で祝詞をあげる時に必ず冒頭に口にする「払い詞」の中に「掛けまくも畏き、伊邪那岐大神、筑紫の日向の橘の、小戸の阿波岐原に禊ぎ祓へ給ひし時に、生り坐せる祓戸の大神等、諸々の禍事、罪、穢れ 有らむをば祓へ給ひ、清め給へと白すことを、聞こし召せと、恐み、恐みも白す」と、ありますが、筑紫とは福岡を、日向の橘とは、日向峠近く、小戸の阿波岐原こそが、今の小戸の浜であるといわれています。



古事記で、伊邪那岐命が禊ぎ祓いを行った神話に基づく祝詞です。

黄泉の国から戻ってきた、伊邪那岐命がその身に纏った、穢れを祓うために阿波岐原の川原で、禊祓いを行い、様々な神様を生みました。祓詞は、この祓戸大神に災い、罪、穢れを祓い清めて下さいと。浄化をお願いしている祝詞です。

猶「阿波岐原」の地名は、他に「宮崎市阿波岐原町江田原」にあり、神社は、江田神社といえます。阿波岐原とは、「樟原」のことで、当地には「樟地域自治区」があります。

2. 住吉神社編

住吉神社の総本社は大阪の住吉大社です。御祭神は、底筒之男命、中筒之男命、表筒之男命の住吉三神と神功皇后です。

神功皇后の新羅遠征のときに、託宣を下してその戦いを助けられたのがこの住吉三神です。その後、長門に住吉三神の荒魂が、摂津に和魂がお祀りされている。

住吉三神に共通する「筒」という字は星の意味との説もあり、星は航海の神ともされている。住吉三神は伊弉諾尊が黄泉の国から帰ってこられ、身についた穢れを祓うため海に入って禊祓

いしたときに生まれた神様です。住吉大神はお祓いの神様であり、航海、和歌、農業などの神様である。

博多 住吉神社編

11月26日(日曜日)JR博多駅で下車、駅前広場はクリスマスマーケットで電飾が沢山の並木にはりめぐられ、美しかった。人出も多く華やいで、私は久しぶりの感覚で興奮した。夜を楽しみにタクシーで神社に向かう、神社は、七五三の着飾りの子供が多く、厚い化粧した親もいた境内でした。当神社は、住吉三神を祭神とし、相殿に、天照大御神・神功皇后を祀っています。



由緒書では住吉三神は遠い神代の昔に、伊弉諾大神が筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原で禊祓いをされたときに、志賀海神社の御祭神・海神三神と警固神社の御祭神・直毘の神とともに御出現になりました。当社の御鎮座は遠い神代の事で年代を定めることは出来ませんが、全国的にも九州でも最も古いお宮の一つです。

住吉大神をお祀りする神社は全国に二千二百二十九社(2129社)ありますが、当社は住吉の最初の神社で、古書にも当社の事を「住吉本社」「日本第一住吉宮」などと記されております。また、平安時代に全国各地に「一の宮」が定められましたが、当社は筑前の一の宮として朝野の厚い崇敬をうけました。

約千八百年前、神功皇后の三韓への御渡航に際し、住吉大神の荒魂は、水軍をお導きになり、和魂は、胎中天皇と申し上げた、応神天皇の玉体をお守りになり、刃を用いずしてご帰還あそばすことが出来ました。よって皇后は住吉三神の御神徳を、厚く敬仰感謝され、新羅の都に国の鎮護として、住吉大神をお祀りになり、また摂津(おおさか)、長門(山口)、壱岐に住吉神社を御創建になりました。

住吉大神のご神徳は、その御出現の由来に拝します様に、「みそぎはらへ」の御霊徳によって我々に「心身の清浄」を保たしめ給い、そしてそれにより生ずる「開運と光明」をお恵みになるのであります。更に、応神天皇の御代から国運大いに開けたこともあり、住吉大神は、文教、殖産、興業、安産、予言の神として信仰されております。

このようにご神徳が広大でありますので、当社への朝廷のご崇敬は特に篤く、神功皇后の勅祭(十月十三日の例祭の起源)に聖武天皇を始め多くの天皇が奉幣あらせられました。特に大正天皇は三度、昭和天皇は五度奉幣がありました。また、当社は諸武将の崇敬も厚く、楠木正成、源頼朝、足利尊氏は祈願文、寄進状を寄せ、神領二千余町歩、神人三百余人に及んだと伝えられています。

祭典は、古来より「相撲」と「鑓流馬」が盛んに行われています、例祭のことを「相撲会祭」とも申し、現代に至るまで特設の土俵が設けられています。新横綱は横綱の免許を受けに熊本の吉田司家に行った帰路、必ず当社に参拝されてきました。

3. 宇美八幡宮(子安の杜)編

御祭神 応神天皇・神功皇后・玉依姫命・住吉大神・伊弉諾命

福岡県糟屋郡宇美町の中央に鎮座する、第十五代応神天皇ご降誕の聖地について、「日本書紀」には、【皇后新羅】より還り給う十二月十四日誉田天皇（応神天皇）を筑紫の蚊田に生み給う時今其の産所をなづけて「宇美」という。

御産舎の四辺に八つの幡をたて、兵士に守らせた故事が【後世八幡大神と称するは此の故なり】とも伝えられています。

八幡大神御降誕の聖地として、敏達天皇の御世に創建され、先ず神功皇后と応神天皇の母子神をお祭り致し、後世に至りて上記の五座としてお祀りされました。

境内には樹齢二千年以上と推定される「湯蓋の森」「絹掛の森」という二本の老樟を始め木々が生い茂り、萌えるような御神威の「命の息吹」を今に伝えており、「安産・育児」の守護神「子安大神」と称され、参拝頂いています。

八幡さん編

八幡神社は八幡宮や八幡社と称される神社も多く、八幡大神(応神天皇・誉田別尊)を主祭神として、応神天皇の母神である神功皇后と比売大神を御祭神としています。比売大神とは、宗像三女神とする場合が多くあります。

八幡さんの起源は、大分県宇佐市に鎮座する宇佐神宮です。第29代欽明天皇の時代(539～571年)に宇佐の地に祀られるようになった、八幡神は、奈良時代の東大寺大仏造立に際しその加護をするお告げを出されます。(神様がお告げを出すことを託宣という)。上洛して東大寺の守護神として鎮座され(現手向山神社)、仏法守護の神様としても崇められています。

以前から、九州の重要な位置に鎮座する八幡神の神威を尊んでいた朝廷からは、国家的大行事の成功に際し、仏号である「大菩薩」の称号も奉られます。

これは神仏習合のさきがけの一つともなったもので、「八幡大菩薩」の称号はここに由来しています。また、同時代末の僧・道鏡による皇位篡奪計画を、その託宣により阻止したことは有名です。このことにより皇位守護の神として崇められています。

さらに、平安時代には国家の守護神として、都の裏鬼門(南西)の方角である男山に鎮座することを託宣し、勧請されました。これが、現在の石清水八幡宮です。同宮は鎮護国家、王城鎮護の神様として朝廷から篤く尊崇され、伊勢の神宮に次ぐ「第二の宗廟」と称されました。この石清水八幡宮で元服の式をあげたのが、八幡太郎義家として名高い源義家です。義家の父・頼義は、源氏の頭領として八幡神を源氏の氏神とし、鎌倉の地に勧請して、武門の守護神として崇めました。後に、頼朝が鎌倉幕府を開いて現在の地に勧請し、幕府の守護神として祀ったのが現在の鶴岡八幡宮です。

以後は、武家の守護神として各地で祀られるようになって行きました。その後、時代が変わっても、八幡神は武士の守護神であり続け、八幡信仰はあまねく全国に広まっていったのです。

4. 宇佐神宮編（謎多き八幡神の総本宮）

祭神 一之御殿 八幡大神(応神天皇)

二之御殿 比売大神

三之御殿 神功皇后

創建 社伝によると、欽明天皇 32 年(571)に「われは誉田(応神)天皇八幡八幡麻呂なり」と告げて示現された神を祀ったのが、当社の始まりである。

現在地に、社殿建立は神亀 2 年(725) である。

社格 式内社 豊前国一の宮 官幣大社

宇佐八幡宮がこと更、謎めいた神と言われることが多い、記紀に登場せず、朝鮮系の渡来神だった可能性もある。一地方神が神仏習合という前近代に於ける主流的な信仰形態を先導する存在となり、伊勢に次ぐ皇祖神として重んじられるに至る。

養老四年(720) 南九州の隼人が反乱を起こし、八幡神はその鎮圧に神威を揮うと同時に殺生を悔いて仏教に救済を求め、生命を慈しむ放生会を創始させる。

決定的だったのは、聖武天皇の大仏建立の発願に対して「神たる私が天神・地祇を率いて誘って、必ず成功させる」といち早く支援を表明したことで、八幡神に対する、官の信頼は、絶大なものとなる。

神護景雲 3 年(769) の道鏡による皇位篡奪未遂でも重要な役割を果たす。朝廷護持の神としての性格を強めた。また、多くの寺院が鎮守として勧請したことも、八幡信仰を全国へ広めた要因でもある。中世には武士の宗教を集め、殊に、源氏が氏神として崇めた。

5. 石清水八幡宮編

祭神 中御前 応神天皇

西御前 比売大神

東御前 神功皇后

創建 貞観 2 年(860)

社格 二十二社・官幣大社

国宝 本社社殿 10 棟 平成 28 年 2 月指定

宇佐八幡宮と石清水八幡宮の祭神は同じだが、違う。宇佐八幡宮では、八幡大神=応神天皇だが、石清水八幡宮では、応神天皇は応神天皇で八幡大神は三柱の祭神の総称なのだ、との異同はあるが。石清水八幡宮は宇佐八幡宮から勧請により成立した、伊勢神宮に次ぐ「国家第二の宗廟」は男山の頂きに鎮座する。

貞観元年(859)宇佐八幡宮に参詣した南都・大安寺の僧・行教が都へ帰ろうとした日「都の近くに移座し、国家を鎮護せん」との託宣を得る、都近くに来た時、再び「移座すべきは、石清水男山の峰なり」とのお告げ。行教は、指定の場所に仮殿を設け、翌年までに社殿を建立させた。

創建された石清水八幡宮は、程なく「石清水の皇太神」「皇大神は我朝の大祖」の評価を受け、

延喜 16 年(916)には加茂社を抜いて伊勢に次ぐ社格をうる。応神天皇・神功皇后との習合により、八幡神か皇祖神とみなされていた。行教には、摂政職の藤原良房がいて、自らが強引に即位させた幼い清和天皇(外孫)を守護すべく、八幡神を都近くにご勧請された。行教による仏教主導体制をとり、神宮寺の護国寺と一体で繫栄した。頂上は、社殿の外は森になっているが、近世以前は、男山四十八坊と総称されて僧坊が多数ひしめいていた。現在の本宮は江戸後期、11代将軍徳川家斉によって造営されました。

6. 高良大社(こうらたいしゃ) 編

祭神 高良玉垂命・八幡大神・住吉大神

創建 仁徳天皇55年(367)または同78年(390)

社格 延喜式内社 名神大社 神階正一位 筑後国一の宮 国幣大社

御神徳 この三柱神を高良三所大神として、人々の生活全般をお守りくださる神として、「延命長寿・芸能上達・厄除開運・交通安全」に靈験あらたかと、古来より信仰されてまいりました。

高良大社は久留米市の耳納連山の西端、高良山の中腹に立ち、山の標高は312メートルと高くはないけれど、聖域としての歴史は長く、1・景行天皇・2・神功皇后・3・懐良親王・4・豊臣秀吉などの国づくりの歴史の舞台でもありました。

- 1・「景行天皇は熊襲征伐と鉄を求めての舞台である」
- 2・「神功皇后は、北部九州遠征に際し、高良山の麓の籬崎に滞在していた」
- 3・「懐良親王は後醍醐天皇の皇子で、征西将軍になり、幾多の戦いに勝利して、征西府が太宰府に置かれ、全盛期であったが、九州探題が今川了俊に代わり、敗れることで、筑後高良山へ、更に肥後菊池へと後退する。1374年ごろ、後村上天皇皇子・良成親王に將軍宮を譲り、1383年3月隠棲先の筑後矢部に於いて亡くなる」
- 4・「豊臣秀吉は天下統一の為、薩摩討伐の為、九州に遠征、その時行く手に羽を持つ犬に阻まれた秀吉は、賢い犬だと思い筑後羽犬に塚を建てた所が地名羽犬塚として残る」



筑後次郎と呼ばれる筑後川は、阿蘇の外輪山の九重山をその源を發し、筑後・佐賀両平野を流れ、有明海に注ぐ九州最大の河川、河川延長143km。筑後川と呼ぶようになったのは、寛永13年という。(明正天皇時代)

高良大社からの田園の眺望は、稲田に蓮華の花や菜の花や久留米ツツジ等々色鮮やかに咲き誇り、心を和ませるものです。

「久留米ツツジは、久留米藩士坂本元蔵がツツジの基礎を作り、世界のツツジの多くが久留米ツツジを親としています。幼き頃は、しじみ貝とり、魚釣り、化石拾い、水泳ぎ、遠足などで興じたものです、日田杉を組んだ家具の町大川への「いかだ流し」は楽しい風物詩でした。

約1300個の神籠石（こうごいし）なる列石は、全長1550メートルに達し、列石の東部は高良神社社殿の裏に達する。神籠石は山に巨石が並べられている遺跡のことで、「鬼が造った神域・結界を表すもの」と言っている。霊域・祭祀跡とも、また朝鮮式山城の防塁跡とも言われ神秘的です。卑弥呼の里と言われる筑後の国「女山」にも神籠石の列石があります。

謎解きに、推理作家の「松本清張」氏も挑んだ遺跡と言われています。



祭神高良玉垂命は、神功皇后が三韓征伐の際、高良記には、異国の兵が九州を攻めた際に、神功皇后が筑紫野国四王寺嶺にてお祈りされると「東方より白雲が現れ四方にひらき、月の光と共に御出現された神とあり、戦勝に導かれました。潮の満ち引きを操る、二つの球を与えたという土地の神である。（干珠・満珠）

後に八幡神・住吉神と合祀され、中世の神仏習合時代に放生会の仏教思想がまじり隆盛を極める。

文永・弘安の蒙古襲来には勅使参向され、蒙古調伏の折には「天下の天下たるは、高良の高良たるが故なり」と綸旨を賜った。と伝えられたことから、「武運長久の神」として、更には、高良神楽の発祥の地であることから、「芸能の神」として崇敬されています。

江戸期に久留米藩主、有馬氏のもとで復興を遂げた九州最大級の社殿は三代藩主有馬頼利が

万治2年から寛文元年に再建したものである。社殿は高さ13m、幅17m、奥行32m、九州最大である。

高良玉垂命の名前の由来は、干珠・満珠を龍宮にて賜ったのち、玉を龍宮から高良へ持って行き、神代に納めたという、干珠は白い玉・満珠は青玉なり、干珠・満珠を高良の神代に納められたことにより、高良を玉垂と呼ぶようになったという。

高良大社は筑後平野ばかりか、佐賀や雲仙をも、一望できる、高良山中腹に位置する。現代の社殿は、1661年に、第三代久留米藩主有馬頼利の命で、普請奉行丹羽頼母重次と棟梁深谷平二郎光盛が造ったことが、棟木近くの墨書に記されている。丹羽は筑後川治水で有名だが、二人は江戸城や日光東照宮の造営も、参加した当時の最高の技術者コンビである。

頻繁に洪水を起こす筑後川を治めるべく、その象徴として、家康の東照宮と同じ、権現造りの社殿を造ったのだろう。檜皮葺きの社殿は、非常に大きく、平屋だが高さは、4階建て相当の13mにも達する、反りのある入母屋が二棟繋がり、正面に千鳥破風と唐破風の向拝を置く、複雑な形を破綻なく納めた手法である。廻り縁にも腰組と呼ばれる、斗きょうが付くなど、装飾的で、完成当初は派手な着彩で絢爛豪華な元禄文化を体現する。幣殿の格天井の絵は狩野白信によるものである。

7. 国宝 石清水八幡宮 摂社 高良神社

高良神社の所在地は、八幡市八幡高坊

石清水八幡宮の麓の頓宮横にあり、貞観 2 年(860)行教律師が建立した神殿の跡に鎮座している。もとは、河原(カワラ)社と称し、馬場先本道を挟んでその前方を流れる放生川の側にあつた。高良神社も、宇佐八幡宮より勧請して、貞観 3 年(861)に大安寺の律師、行教によって建立された古い神社である。同社は慶應 4 年(1868)鳥羽伏見の戦いによって消失してしまったが、明治 15 年(1882)に再建され、現在に至っている。

吉田兼好の徒然草にも高良神社の名前が登場する非常に歴史のあるお社です。元徳 3 年(1331)、「ある日、仁和寺の和尚が石清水八幡宮を詣でようと訪れ、極楽寺、高良神社を詣でた。参詣を済ませ、さて帰ろうとしたとき、人々は山頂を目指して階段を登っていく。

何だろうと思ったが、私は今回の旅の目的である石清水八幡宮に参詣を済ませたのだからと帰ってしまった。後で石清水八幡宮が山頂にあることを知って。どんな小さなことでも、案内人は必要だと痛感したと、云う。

私は真逆であります。過去に牧野に居住していたので、正月の慣例行事等々で頻繁に石清水八幡宮には参拝していました、麓に高良神社が鎮座していることは、八幡市観光協会の方の観光案内で初めて知りました。私には忘れられぬ、故郷の筑後国・一の宮、高良大社の玉垂大神は、心の故郷であります、何故、関西の地に勧請されてきたのか、多分庶民がお参りできる、産土神を求めたのだろうと思いを致すが、御神徳、御神威を知りたいと思いました。

狭い境内には樹齢 700 年のご神木{タブの木}があります、古来より厄除けの木として、崇められていたそうです。(クスノキ科の常緑高木です)石清水八幡宮は、遷座当初から国家、皇室さらに武家の守護神として尊崇されてきたためか、もっぱら地域の人々が心のよりどころにした氏神は「高良神社」であったようです。神社の例祭は毎年 7 月 17 日、18 日に行われ、通称「太鼓祭り」として親しまれています。

毛利信二様より寝屋川にも「高良神社」があることを紹介されたので、早速訪ねる事にしました、今は、北河内神社一覧の本では、打上神社と称していますが、明治時代以前は、高良神社と呼ばれていたようです。坂道を上り詰めると「鉢かづき姫」が迎えてくれます、鳥居の扁額と石柱には、今も高良神社と書かれています、石段を上がると広場がありますが、シーズンオフで殺風景でありました、眼下は高いマンションが立ち並び讃良平野は見えなかった。 ついでに古墳の「石宝殿」見学しました、天井の土は有りませんが支えあう石柱はローマの神殿を極小化したものに見えました。石宝殿は、7 世紀の横口式石郭で、北河内地方では唯一です。他には、明日香の鬼の俎、鬼の雪隠があります。

